

オンライン大学における学生の学習パターンの分析と学習者支援の試行

Analysis of Student Learning Patterns and Attempts at Learner Support in an Online University

加藤 泰久

Yasuhisa KATO

東京通信大学 情報マネジメント学部

Department of Information and Management, Tokyo Online University

Email: kato.yasuhisa@internet.ac.jp

あらまし：高等教育のオンライン学習環境においては、メンタリングを効果的に実施すること等でドロップアウト率を下げられる可能性がある。オンライン大学における初年次必修科目の学生の学習パターン及び教職員による学生支援の実践について、2018年度～2024年度の7年間の実践の比較を通して分析を行う。適切なタイミングで適切なメンターがメンタリングを実施することで、ドロップアウトをできるだけ少なくできる可能性があるが、入学者層の変化、システム障害、休日の日程などによる影響が大きく、一定の方法と日程が最も効果的であるという最適解は開学後7年目の授業実践においてまだ得られていない。最適なタイミングでの最適な学生支援については引き続き状況に応じた検討を続ける。

キーワード：学習パターン、eラーニング、オンライン大学、学習者支援

1. はじめに

社会人の学び直しを中心としたオンライン大学における、2018年度から2024年度までの1年次必修科目の授業実践を概観・分析する。オンライン大学においてはオンライン学習者スキル⁽¹⁾を身につける必要があり、学習意欲は学習を継続させる主な要因の一つとなっている。本講ではドロップアウトをできるだけ少なくすることを目的としたオンライン大学における学習者支援に対する取組について述べる。

2. 関連研究

高等教育機関のオンライン学習環境におけるドロップアウトに関する研究は今まで多く行われてきているが、各大学の状況が大きく異なるのが現状である⁽²⁾。学習継続を疎外する一つの要因として、孤立感が挙げられている^{(2),(3),(4)}。孤立感を解消し、適切な援助要請行動⁽³⁾が習得できれば、学生は授業の最後まで学習を継続できる可能性があると考えられる。

3. オンライン大学における学習環境

本講では2024年度1学期における1年次の必修科目についての学生の履修パターンと学生支援の実践について2018年度からの授業実践と比較して述べる。2021年度から2023年度については、授業配信期間が8週間であったが、2024年度に関しては、学事暦の都合上、7週間と2日となっている。

4. オンライン大学での授業実践

1年次必修科目の2018年度から2023年度⁽⁵⁾及び2024年度の各1学期における学生の各回の学習率を図1に示す。3年次編入学生を除き、1年次入学生を対象にしている。2024年度については、単位認定試験が未完了のため、最大の予測値である。図1において、2024年度の授業回の第1回から第8回の全回に対して、どの回もほぼ、2018年度から2023年

度の平均に近い数字となり、2023年度の結果を若干下回る結果となった。ここで学習率とは、第1回第1講の映像教材(約15分)を最後まで視聴した学生を100%とし、以降その学生の内何%が各回の受講または単位認定試験を完了したかについて表示したものである。例えば、2024年度の第8回については、学習率は約76%であるが、これは、第1回第1講の映像教材の履修を終えた学生全体の約76%の学生が第8回の履修を完了し、残り約24%の学生については第8回が未完了であるということを示している。また、単位認定試験は全体の授業回の2/3以上の出席が受験条件であるため、単位認定試験の学習率(受験率)は第8回の学習率よりも高くなっている。

次に、図2は、授業配信期間における1週間毎の学生の全体に対する進捗率の平均を示している。ただ配信期間中1回も学習を完了していない学生のデータは除いている。各週平均的に全体を履修すれば、1週間あたりの平均学習進捗率は14.3%(2023年度以前は12.5%)となる。

5. 考察

図1に示した通り、2023年度は第8回までの全回において、従来の年度と比較して、平均的な学習率を示した。

次に、図2に示すように、週毎に学習進捗率の推移を見ると、2023年度の学習のピークが第5週にずれってしまったのは、ゴールデンウィーク中にシステム障害が発生したのが原因である。2024年度は、4週目よりも休日後の5週目の学習進捗率が少し大きくなる傾向となった。ゴールデンウィークの前半と後半の分散による影響の可能性もある。ただ、2020年度以降で、今年度が第1週の進捗率が一番大きい結果となった。1学期は従来よりも5日間授業配信期間が短いことを新入生オリエンテーション等で告知していた影響も考えられる。

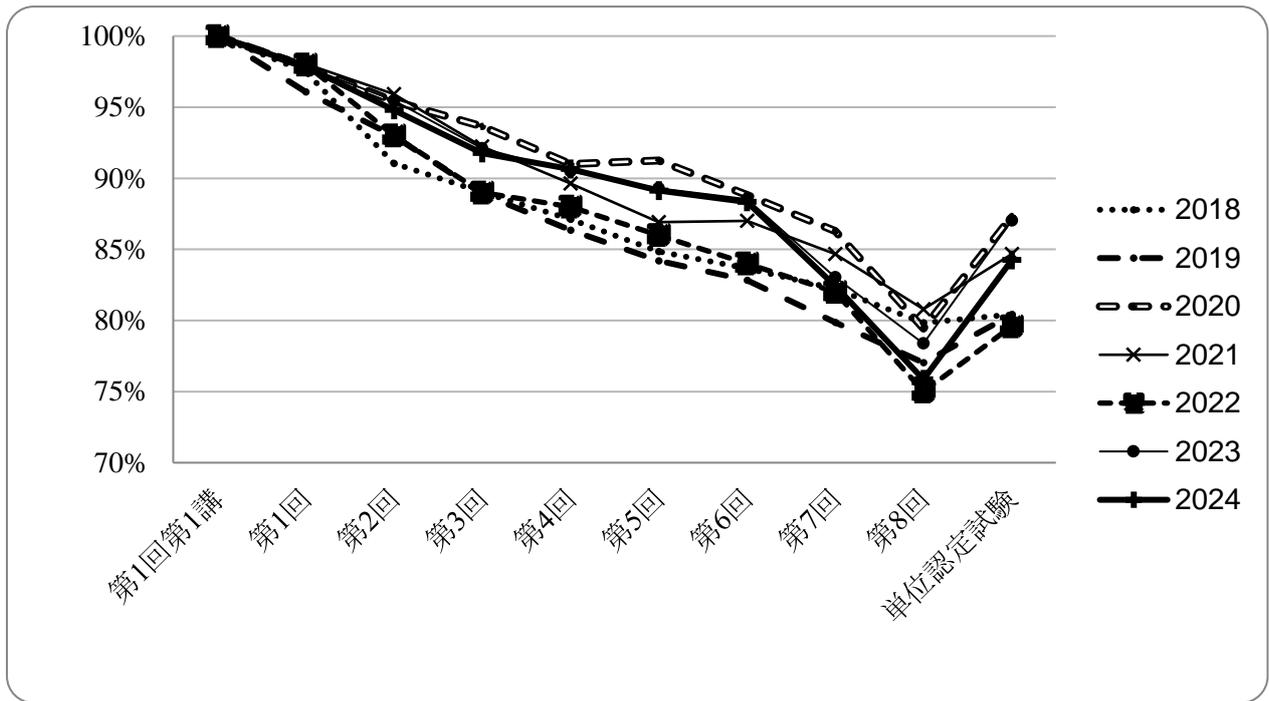


図1 各授業回の学習率

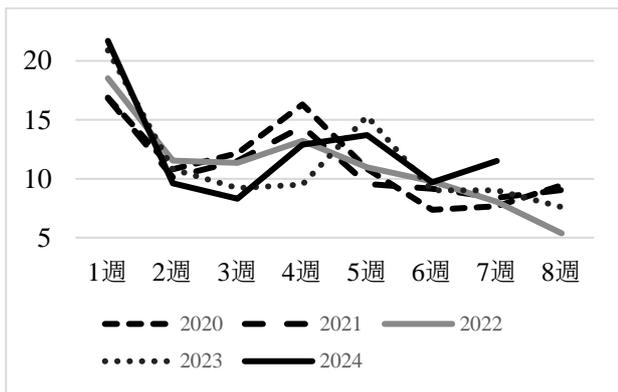


図2 各週における学習進捗率の推移

しかし、1週目の反動で2週目と3週目の学習進捗率は、この5年間で最も小さくなってしまった。2022年度までは、2週目に進捗率が下がり、3週目に入り、アカデミックアドバイザーの担当教員から進捗が遅れている学生への励ましメッセージを送るところで、持ち直し、ゴールデンウィーク期間にピークになるという傾向であったが、2023年度以降、2週目から3週目の学習率が上がらないという状況になっている。又、今年度はゴールデンウィークが前半と後半に分かれていたこともあり、それほどピークにはならず、ゴールデンウィーク後の5週目の学習率が一番大きかった。

6. おわりに

2024年度は若年層の新入生が増えたことにより、ゴールデンウィークの休日に入る前の4月末に、Teamsを利用した1年生向けの同期型の学生と教員との交流会を開催し、疑問や質問を解決することを

試みた。約30名が参加したが、このような同期型のイベントの効果については、検証が必要である。

今後は、新入生オリエンテーションでの学び方の説明の強化、アカデミックアドバイザーから学生にメッセージを送るタイミング等を検討し、学習者支援の活動計画を随時見直し、さらなるドロップアウト率の低減及び授業完遂者増を目指す。

謝辞

本研究の一部は JSPS 科研費(22K12303)の助成を受けたものである。

参考文献

- (1) Michael Beaudoin et al.: “Online Learner Competencies (The Ibstpi Book Series)”, Information Age Publishing (2013)
- (2) Rahmani, A. M., Groot, W., & Rahmani, H: “Dropout in online higher education: a systematic literature review”, International Journal of Educational Technology in Higher Education, 21(1), 19 (2024).
- (3) 石川奈保子, 向後千春: “オンライン大学の学生のメンターに対する学業的援助要請態度とつまづき対処方略”, 日本教育工学会研究報告集, 17(5), 203-210 (2017).
- (4) 石川奈保子, 石田百合子: “オンライン授業での大学生の自己調整学習方略使用と学習計画の立て方との関係”, 日本教育工学会論文誌, 46(4), 641-652 (2022)
- (5) 加藤泰久: ” オンライン大学における学生の学習パターンの分析と学習者支援”, 教育システム情報学会全国大会 (2023)